



名古屋城

子ども博士になろう



がくしゅう げいのう へん
学習シート「芸能」編

—なぜ名古屋は「芸どころ」になったのでしょうか—

「芸どころ名古屋」になった基礎



みなさんは、「芸どころ名古屋」という言葉聞いたことがありますか。

名古屋は、茶道や華道、芝居や舞踊など、様々な芸ごとが盛んな地域ということです。

名古屋は、広大な濃尾平野に位置し肥沃な土地でした。殊に、徳川家康が名古屋城を築き、碁盤割の城下町を開くと、商工業も発達し、一層経済的に豊かになりました。この名古屋の地に芸ごとを教える人、習う人、支える人たちが現れて、数多くの芸ごとや祭りなどが生まれ、育ちました。

ともに芸能への理解が深く熱心な支援者で、自らも芸をたしなむ藩主でした。

義直は、幼少のころから小鼓の名手で

あったといいます。写真の小鼓は、義直が、父家康の名代として大坂城の豊臣秀頼を訪ねた折りに贈られた能道具で、義直が少年時代から使っていた小鼓です。



かりたまきえこづつみ とくがわびじゆつかん ぞう
「苜田蒔絵小鼓」(徳川美術館蔵)

©徳川美術館イメージアーカイブ／DNPartcom)

「芸どころ名古屋」へ導いた 初代藩主義直と2代藩主光友



名古屋が「芸どころ」になるには、歴代の藩主の影響も大きく、とりわけ、初代徳川義直と2代徳川光友の親子は、

また、義直は、甥の3代将軍家光の

面前で踊りを舞ったことがありました。

江戸城での茶宴でのことです。義直は、

尾張から連れてきた踊り子の若衆23人の

中心となって、小鼓や太鼓の拍子に

乗って踊って見せました。藩主自ら率先して踊る姿に、

将軍家光や居並ぶ大名たちも大いに驚いたことと思われます。

子の2代光友は、いろいろな芸能に秀でていましたが、とりわけ能の舞に長けていました。側に仕えた家臣たちも、自然に藩主を見習って能やお囃子などを習いました。

尾張徳川家では、能とともに狂言や笛などの囃子方も保護してきました。



狂言「釣針」シテ:野村又三郎(名古屋能楽堂三月特別公演) ©公益社団法人能楽協会

義直以来の山脇和泉流狂言の流儀は、「名古屋狂言共同社」という団体によって現在も受け継がれています。

町人たちも招かれた 名古屋城の能

尾張徳川家には、二之丸御殿に表舞台と奥舞台の二つの能舞台がありました。次の写真は、徳川美術館に復元されている二之丸御殿の表舞台です。藩主の代替りや世継ぎ誕生の際には、こうした舞台でお祝いの能が催され、僧侶や神官、有力な町人なども招



復元された二之丸御殿の表舞台
(徳川美術館蔵)

©徳川美術館イメージ
アーカイブ/DNPartcom

町人たちは、舞台下の白洲(白い砂が敷いてある場所)に敷かれたむしろに座って見ました。

こうしたことから次第に、武士中心であった能が、豊かな町人層にも親しまれるようになっていきました。

「芸どころ」に花を咲かせた 7代宗春

7代藩主を継いだ徳川宗春は、経済の繫栄を図り、芝居や祭りを奨励する政策を積極的に進めました。このために、城下の商業などが大いに発展し、



「享元絵巻」(部分)
(名古屋城総合事務所蔵)



いろいろな規制が緩やかになって、藩士や町人の間に芝居見物や芸ごとの稽古、祭りなどが盛んになりました。一

方、この宗春の政策は、当時の江戸幕府が進める質素儉約などの政策とは対立するものでした。しかし、宗春は、名古屋をにぎやかで、活気ある町にしたいと考え、自らの方針を推し進めてきました。

左の絵は、宗春時代の繁栄する名古屋の町を描いた「享元絵巻」の一部で、七寺付近の様子です。当時は、寺の境内にも、芝居小屋があり、参道や通りは大勢の人々でにぎわっています。

下の絵は、当時の芝居小屋の中の様子です。立ち見の人々で埋まり、芝居見物の熱気が伝わってくるようです。



「橋町裏大芝居之図」(『尾陽芝居事始』の内)
(名古屋市鶴舞中央図書館蔵)

全盛期には、寺院や神社の境内などに約60もの芝居小屋が建ち、歌舞伎や浄瑠璃、見世物など様々な興行が行われていました。

江戸時代に始まる 名古屋三大祭

名古屋には、江戸時代から今日まで続く「名古屋三大祭」の東照宮祭、天王祭、若宮祭があります。

当時の東照宮祭は、名古屋最大の祭りです。元和4年(1618)4月17日、家康の命日に合わせて、初めて行われました。三基の神輿が名古屋城外へ出て碁盤割の町中を練る行事でした。

やがてこの神輿の列に、からくり人形を載せた山車も参加し、きらびやかで盛大な祭りになりました。中でも、七間町の「橋弁慶車」は名物の山車でした。

これらの三大祭の山車行列は、名古屋城三之丸まで入ることができ、藩主や家臣たちも祭りを楽しみました。



「東照宮祭礼図」(橋弁慶車部分)(名古屋市鶴舞中央図書館蔵)

こうした神輿や山車を引く形の祭りは、次第に近隣の農村などにも広がり、庶民の楽しみを作り出していました。

えどじだいのねづ
江戸時代に根付いた
おのげい
多くの芸ごと



えどじだいのなごやのうきょうげん
江戸時代の名古屋では、能や狂言
のほか、さどう、かどう、ぶよう、こうどう、はい
他に、茶道、華道、舞踊、香道、俳
かいはいくおのげいねづ
諧(俳句)など、多くの芸ごとが根付き、
ひろしんとう
広く浸透してきました。

さどうちやゆれきだいはんしゆした
茶道(茶の湯)は、歴代藩主も親しみ、
おだのぶながおとうらうらくさいはじめ
織田信長の弟織田有楽斎が始めた有
らくりゅうせんけりゅうおこな
楽流や千家流が行われました。

まつおりゅうきょうとせんけりゅうまな
松尾流は、京都の千家流を学んだ
まつおそうじはじ
松尾宗二が始めた名古屋の流派です。
こうしたりゅうはひろしだいに
こうした流派の広がりとともに、次第に
ちやういんのうみんあいださどうひと
町人や農民の間でも茶道をたしなむ人
がふ
が増えてきました。



かどういばなさどういったい
華道(生け花)は茶道と一体となって
はってん
発展しました。名古屋では、松月堂古
りゅうひろほかりゅうは
流が広がり、その他の流派も生まれ、
した
親しまれました。

ぶようぶけちやういんあいだおこな
舞踊は、武家をはじめ町人の間で行
しやうだいにしかわこいさぶろうどくじ
われました。初代西川鯉三郎が独自の
おどきひらげんざいなごや
踊りを切り開きました。現在の名古屋
にしかわりゅううつりゅうは
西川流はこれを受け継いだ流派です。

はいかいしやうふうまつおぼしやうもんじん
俳諧の蕉風(松尾芭蕉とその門人に
よるはいふう)は、なごやほっしやう
よる(俳風)は、名古屋が発祥です。貞
きやうがんねんぼしやうたびとちゅう
享元年(1684)に芭蕉が旅の途中で
た立ち寄り、ごばんわりすはいじんよ
立ち寄り、碁盤割に住む俳人たちと詠
んだ句集がきっかけでした。



なごやほんやふうげつどう
名古屋の本屋「風月堂」
に立ち寄った芭蕉
([尾張名所図会]の内
あいちけんとしやかんぞう
(愛知県図書館蔵))



ひだりしやしんこうどう
左の写真は香道
の聞香の様子です。
きやろなどのこうぼく
伽羅などの香木を
たつかかおゆうれつ
焚いて香りの優劣
ちがいのげい
や違いを楽しむ芸ご
とです。

もんこうしりのりゅうこうどうしやういんかいていぎやう
聞香(志野流香道松隠会提供)

どどいつあつたみやしくう
都々逸は、熱田の宮宿で生まれた伝
どううたしちしちちこうちやうけいかい
統の歌です。七七七五調の軽快なり
づむにのってうたえどじだいまつき
ズムにのって歌われ、江戸時代末期に
みんかんだいいりゅうこう
民間で大流行しました。

なごやじんく
名古屋甚句の『名古屋名物』は、
えどじだいらい
江戸時代以来のやわらかく温かい名古
やうた
屋ことばで歌われる唄です。

へいきよびわばんそうかたげいのうぶ
平曲(琵琶の伴奏で語る芸能)も武
しちゅうしん
士を中心に、長く親しまれてきた芸能で、
こんにちけいしやう
今日も継承者がいます。